

たにのみぞなびける  
秋の頃御馬石のほごりにものして  
全 人

たかためにこき世めくらむみこまいしたづな  
にかくるつたのもみちは  
戀か浦にまかりてよめる全 人

かへらるく身にもあはれは思はれてむかをしを  
かたる戀の浦風  
今泉定介

そのかみをおもひおこして大前にたくぬかつ  
きてなきになきけり  
建部遜吾  
博文士學

眞野御陵參拜

眞野村字堂  
所御所跡

世の中よさもあらはあれいく秋のあらしにむ  
せふ御陵の松

謁 順徳天皇御行在所迹  
作歌一首并短歌  
全 人

八隅しくわか大君高ひかるあきつ御神のあれ  
ましく宮居のあこを海こねてわかこひ來れは  
峰高み雲そ迷へるしこ草の今もしげれるその  
草をかりつくさすこ其雲をうちはらはすこゆ  
ゆしくもおもほしたすみ軍はひむかし年起  
つ三柱の玉の御輦あまさかるわたつ嶋根に立  
わかれ御幸ましつよる浪にみここ問はし杜  
宇鳴く聲やめてむなしくも都こひしみ二十年



をうちわひましく木の丸のかり宮ごころ見れ  
はかなしも

返歌

松風は何をかかたる七百秋の昔を今に思ひあ  
はせて

戀浦覽古

全 人

心なき白波なんぞたちかへるならひもあだに  
戀か浦風

順徳天皇の眞野の御陵にまうで承久の  
昔を偲び奉りてよめる歌並短歌

豊嶋有常 東京人

澳津浪千重よする佐渡か嶋眞野の御陵かしこ

くもをろかみまつりそのかみを偲ひ奉れはあ  
やにあやにうれたきかもよくなたふれ平の臣  
か天の下人を欺きもろの犯せる罪を御身  
つから罰めまさむごたふさきや吾大君は神な  
からおもほしめして皇軍を召給ひしを禍津日  
の神の禍かも事ならず御心をけす沖つ嶋これ  
の小嶋にうれたくも宮居をうつしゆくしくも  
過まじにけむそこ思へはいきこほろしみ涙し  
なかる  
そのかみを偲ひ奉れは數ならぬ賤の男吾も髪  
さかたつを

眞野山陵を拜みて

全 人



ふし拜む袖の上にもこほろくは御陵のまつの  
雫なりけり

まの山の昔偲へは松にふく風もしくれてつゆ  
そこほろく

真野山 皇居の跡を拜みて

全 人

神さひて茂木おひ立まの山の宮居の跡そあふ  
かれにける

神さひし真野の宮居のほこ杉もあふけばいた  
く年は経にけり

和泉村なる黒木の御所さいふ跡をたづね  
て

全 人

かりみやのみ跡さきけは一むらの松の木立も  
畏かりけり

大宮の跡さて今も老松に千代のかけこそなほ  
のこりけれ

御腰かけの松さいふに 全 人

大宮のみ跡をさへは大御袖ふれけむ松はいま  
ものこれり

梅津村真法院境内なる

順徳天皇御遺愛の苔梅さいふを見てよめ  
る歌並短歌 全 人

名くはしきこれの梅はや其幹は高く聳ねて其  
枝は四方にひろこり苔むせる大樹なるかも其



昔吾大君の御手つからこゝに移してめてまし  
し梅さしきけはあや錦御けしのかをりかしこ  
くもおもほゆるかもごふ人の袂にかをり行人  
の袖に匂ひて苔むせる老木の梅はたくひなき  
かも  
大君のみ袖ふれけむ梅の花そのうつり香に今  
もにほふか

戀か浦

全 人

こひか浦しほ風あれて此夕いそうつ浪のおこ  
そさひしき

日野阿新丸のかくれ松さいふを見て

全 人

萬代にかたり傳へてかくれ松かくれぬ名こそ  
高く聞ゆれ  
父の仇討てかくれしかくれ松其名も千代に朽  
せさりけり  
ますらをかのこすかたみのかくれ松かくれぬ  
ものはいさほなりけり  
堀内文次郎陸軍中將  
草も木も昔を語るみささきの眞野のあたりは  
今日もしくる  
ひくらしの啼音はやみて月はまたのほらぬさ  
きに我ひごりなく

眞野御陵

吉井 勇

吉井伯  
爵嗣子



松風や御陵みちのうすじめりわが足音もさむ  
 きあさかな  
 御陵のまへに落ちしもあはれなり秋の名残り  
 の蝶のなきがら  
 わが世憂しひとり寂しくこの嶋の陵守となり  
 めべき身か  
 こゝろなきこの旅人も眞野に来て佐渡の帝の  
 御硯に泣く

今井兼寛 文部省  
屬

峰間信吉 文部省  
督學官

磯の上の古き昔をしのふかな眞野の御山のひ  
 くらしの聲

ひくらしの聲身にしみて背の汗のひへわたり  
 けり眞野の御山に

片桐正吾 直江津警  
察署長

御陵の松の嵐をきくさへにそのふるここの偲  
 はるゝかな

三崎民樹 新潟神宮  
支署長

御心も今はなこみて神なからしつまりまさむ  
 眞野の新宮

僧 宗般 京都大  
徳寺

百敷や古き軒端の御歌こそ今も涙に忍ひかね  
 つれ

眞野山の御陵をおろかみ奉りて



原 宏平 新發田人

袖のうへにおつるはかなし今もなほありし昔  
の松の下露  
問はなくに昔かたらふ心地して聞けは身にし  
む子規かな

全 人

うちよする浪のしふきに大君のみけしの袖の  
ぬれけんおもほゆ

黑板勝美 文學博士

荒浪のさがしまねにいくごせのおほむなみ  
たの月日をそおもふ  
しこのおみ打ためさんごすめろぎのたゝせた

まひしむかしをそおもふ  
みたま垣のうちにうゑたる松櫻榊さか<sup>ね</sup>て御  
代まもりたまへ

順徳聖主の御墓に詣つゝかゝる遠嶋へ遷  
幸なりし事を思ふに百敷や古き軒端の忍  
ふにも叡慮にかけ給ひしは今此石のしる  
しに這かゝる草の名に有けるごむかしゆ  
への悲しきにほろほろご落る涙を押へて

僧 見林 松山大願寺

岩根松いさごごくはむいにしへの忍ふにかゝ  
る草の名やたれ  
順徳帝の御廟にぬかつきて



百敷ごよみたまひしはむかしにて今も忍ぶの  
生る御陵 全 人

さすらへの松五百餘年にして枝はこここ  
ごく都に向ひたれたり

全 人

頃はいついつ百年をふるこここの枝は都へさす  
らへの松

寶曆末のここし七十あまり二ごせの春も  
すぎ夏なき水の涼しさも深き惠のゑにし  
ありてか廿餘年の春秋に仕へ奉り掛卷も  
眞野の入江の御製をおもひ出て

僧 融 弁 眞野眞  
論寺

流れこし眞野の入江のこくかしこ幾世すむら  
ん水の水上

眞野といふ山里の里の名によせて陵へま  
うて侍らんこ山本氏すくめければ恐れみ  
なから愚なる意をのへ侍る

鈴木廸吉 本郡夷  
町人

おほけなき跡はこしふる里の名の眞野あたり  
なる思ひこそすれ

眞野てふ所に行て建曆の御門の  
御陵を拜み奉りて 中山千鶴 本郡河  
原田人  
すべらぎのみあさはるかにあふくかな雲井の



よそのみ山べの松  
大君はいかにますらんたみくさのそでさへぬ  
るく松の下露

○ 本間季喜 本郡北  
方人

眞野山にたかき印の松風は昔の秋をしのぶこ  
ゑかも

神さびてしるしの松のいや高きかけやむかし  
のかり宮ごころ

佐渡院のみさくきををろかみて

澁谷秋守 本郡小  
木人

都をば古きのきはごしのばしてこの島山にみ  
よへしか君

順徳帝の御陵に詣てくよみ侍し

僧 良然 小木正  
覺寺

ももしきやふるき軒端のふるわらをしのぶに  
あまるみしるしの松

海老名義恭 相川人

咲しより花の雲井ごなりにけり春や昔の忘れ  
形みに

司馬盈之 本郡新町人  
後住尾張

御所櫻  
いにしへの九重なりし八重さくら今日はひな  
にも香ぬるなり

五月はかり眞野の山陵に詣てけるごき螢  
を見て  
山田良範 相川人



かり宮の衛士のたく火ご今もなほ真野の入江  
にごふほたるかな

真野山陵

中村春彦

本郡港町人

真野の山御墓の苔におくつゆやふりしみゆき  
のなごりなるらむ

真野山陵をぬかづくをりしも花のちりけ

れば

全

人

真野山の御墓のさくらちりかくり哀もまして

ふかき春かな

おほみはかぬかつく袖にみだれあひてちるは

さくらの花かなみだか

苔梅を見に行て

全

人

うゑにけん君がみそでのうつり香のなごりも  
ふかくにほふ梅が枝  
こけむしく老木の梅の今もなほふりせぬ物は  
色香なりけり

松原御中

相川人

真野山の松のした露身にうけて土はふむしも  
音にそなかるく

御船石御馬石を見て

全

人

天なるや浮はこの上に大み船通はずなりし昔  
かなしも

大内にいませばいつこ赤駒のはらふ田居を見  
ればかなしも



順徳院天皇の御還幸の仰こそあらせられ  
恋か浦誰がおはせけんかへらしのなみも昔に  
かへる御代かな

順徳院天皇の御還遷の御先導して小木の  
港につきけるに雨ふり出て御輦を二日三  
日はかりここに駐めさせられければ

全人

御還をいはふものから國人のしたふなみだや  
雨ごふりけん  
年あまたいつきし神にませばこそしたひまつ  
れる島人あはれ

嶋人をあはれご神もおほすらんこくに幾日か  
船かかります

承久帝の御霊の御かへさを

藏田重時 相川人

みかへさの錦の旗手なびかせてふれるみいづ  
の御世の神風

石抱梅を

全人

いだきつる石もいはほさならむまでさかゆく  
梅の一樹ならまし

眞野山

上月亮

相川人

かしこさに眞野の山風夏なから身にさねさほ  
る心地こそすれ



順徳院天皇は承久の世のみだれに此國へ  
遷幸ましまして廿年あまりの春秋をこく  
に送り迎へ給ひて仁治三年七月はかり神  
さり玉ひければやがて雑太の郷なる眞野  
の里に陵をいさなみて國分寺をして守ら  
せ玉ひけるに御世のこそ何くれさあらた  
められける明治七年五月はかり難波の水  
無瀬の宮に還遷なし奉るべきみこのり  
によりて眞野のかり宮には在りし世には  
かせ玉ひたる御劍一振をのこさせ玉ひて  
式部權助橋本實梁朝臣おこそかに供奉な  
して難波に御うつりありけるさきかしく

全 人

くもおもひしこそ

あふき見し島根の月も明日よりは難波の海に  
照渡るらん  
御歸さのみいづかしこみ海原や龍てふ神もみ  
船守らむ  
神寶一種のみをのこしておきて思ひたたしく眞  
野の浦浪  
○ 太平 淡 相川人  
かしこくも龍の御衣のいちしるく雲井にかへ  
る時は來にけり  
○ 長谷川安資 相川人



雲はれて水無瀬へうつる空の月あふく袂もな  
そや露けき

河野修 相川町人

○ 眞野山のみねのあらしも御舟出の追手となり  
てあこしたふらん

順徳上皇御還幸を拜み奉りて

長谷川安邦 相川町人

いにしへを戀が浦浪今はこて清き水無瀬にか  
へる御代かな  
をろかむもけふをかぎりこみ榮にもわすれて  
ぬらすわが袂かな

承久帝の御魂を津の國水無瀬の社に移し

奉りけるに 山中大觀 相川町人

てる月の光おほひし雲けちて都にかへす眞野  
の山嵐

○ 藏田信中 相川町人

雲の上をよそにこいひし大み言そらここにし  
てかへる秋かな

戀が浦 よる浪はたちかへれこもかへり來ぬ昔を今も

戀が浦かな 順徳天皇のみたま御寶輦にて御還幸なし

玉へるををろかみ奉りてよめる

玉置清麿 本部武井人



佐渡の嶋のあら磯波にぬらしましく玉のみけ  
しはけふやひつらん

明治七甲戌年五月六日奉拜禮

順徳院天皇尊像還御謹而詠歌一首並短歌

本間三千矛 本部八幡人

天雲の向伏す極み。谷蝦蟆の狭渡る極み。しろしめす國の眞ほら。内日刺都あくかれ。天放る鄙に。久敷行幸して。隠り玉へは。世は闇に。奸雄さつき。五月蠅なす。人悉沸ぬ。其上の神代のむかし。瓢方の天照神の。岩屋戸に。籠らせるごと。世の中は。常夜行ごと。百年まり。六こ來經つも。玉ちはふ。神みの靈か。立覆ふ。神の御稜威か。明治昭代は。往古

の。神ごふ神の。道ひらけ。立渡らひて。掛卷も。文に畏き。皇孫の。御迎たくし。言卷も。ゆくし。畏し。大變輿。みよそひなせは。民人ら。貴き賤敷。老若き。見送奉り。緑子の。母したふ。こ。孤子の。父したふ。こ。したへ。ごも。神は。こまらず。津の國の。水無瀬の。宮に。宮柱。太しりたて。常住不變に。しつもらすなへ。神宮は。いよく榮るむ。御靈わけ。此方に。祭る。御劍の。いつの。尾羽はり。靈太刀の。神靈いや。ちこ。凡人の。たゝ心には。最久に。をもほゆる。かも。いや。遠になけ。かひぬれ。ご。天地の。あるらん。かぎり。月も。日も。照るらん。限り。遠長く。榮る。まさなむ。高光る。日の。御子神の。御代社は。常盤に。まさぬ。久しけ。こ。



六百年まりはつかの間そ。またくひまそ。おほ  
ろかに。思ひななしぞ。いさゝめに。思ひなやりぞ。  
天地のむた常しへに。治しめす。國の眞ほらま。畏  
しこけれごも。  
天照らす神の御稜威に雲はれてまた明らけき  
世を仰ふくかな

秋の末つかた眞野の御陵に詣て

廣橋庭世 本郡 小木人

戸はりごも見そなはしませ御陵の木々の紅葉  
の是の錦を

山陵の邊にはひもごほりて

岩間政養 本郡 相川人

眞野山の夏も身にしむ白露にたへすや虫も音  
に鳴れける

籠手田知事公の眞野宮に詣て給ひて殊更  
に御祭の式を擧させらるゝ時郭公を聞て

全 人

ぬさまつる御心しりてなれも亦音に啼るくか

山郭公

順徳院天皇の御陵にて 高田慎藏 相川産後 住三東京

そのかみのみおもひ晴れてみたらしのあたり

もきよきまのゝ神垣

眞野の山大みさゝきの木のもごに昔忍ひて袖  
ぬらしつゝ



如月はかり眞野山陵に詣てかここみよみて奉るうた

佐野小夜子

本郡澤根人

眞野山の青葉をわけてぬかつけはむかをしを忍ふ袖そ露けき  
あふきてもなほあまりあり眞野山の本高き松のおくつきごころ

日野贈二位公の御墓にまふてくよみてたてまつる

全人

そのかみの君かいさをしくちせねは今そ雲井に御名をあけつる  
うつゆふのさわ田にちりし紅葉の心のにしき今もくちせし

### 連歌之部

眞野の尊廟を拜し奉りて

九重にさかぬやうらみ八重櫻

四百年猶あまりあり苔のつゆ

世にしのぶ跡や八雲の山のはな

松はしりぬ問ん其世の春もかな

色よきを摘て手向ご董かな

櫻をも見なからしのふ昔かな

あはれ今もむかしの跡に櫻かな

仰き見るこれや昔のまつのはな

松に見よむかしも今の春のいろ

里村玄川

辻守遊

中山頓榮

中山元陳

中山元篤

全人

中山春嗣

中山春宜

中山好教



木すら皆しのふ都や松さくら	中山好愷
古き世のなかめそ花にしのふ草	中山富救
忍ふ世そふるきのさばの山櫻	本間保忠
ちるそをし猶あまりある軒の花	本間保久
聞やいまむかしの花のにほひ鳥	遠藤友好
忍ふこそ今みさゝぎのさくら花	松村常久
昇にしむかしのや見んはる霞	鈴木有弘
物いはぐむかしのを語れもゝの花	岩原有方
松にごへごむかしの春の聲もなし	長松軒橋井
露はなほあまりて深ししのぶ草	僧 如空
聞やむかし花も九重八重さくら	椿立菴幸雅
夏迄も神の随意さくらかな	本間好祖

神の森ごしるしや松の夏木立	全 人
花の名に神のめぐみやふかみ草	今井好久
さくら木の苔も昔をしのおかな	義定
仰くこそ雲井ごおもふ山さくら	重賢
陵の松ものいはでしげりかな	由紹
見しかげは雲井にありつ夏の月	行中
聞し世をかく忍べごやほごきす	全人
もゝしきや茂りに忍ぶ其むかし	孝時
順徳院の陵を拜し奉ければ折節郭公音傳	土屋成香
侍りて	
雲の上にくそ床しきほごきす	土屋成元
陵の松物ふり侍りければ	



松にこはん昔のあごをほこくぎす

御所櫻

海老名義恭

世に高く匂ふは花の雲井かな

戀か浦

全 人

よるこ見てかぬ波やはつ尾花

### 俳諧之部

佐渡の眞野こいへるやまさごに

順徳院の御陵たゞせ給ふ一日河原田の人

々に道引れて雪の高濱なこいふ浦傳ひし

て御陵を拜したてまつるいこもかこき

おん上においてはさらにいはん言葉を吞

世の風波を感じたてまつる

馬場左角近江人

飛のいて拜むさくらや松の露

○なく蟬も腸あらばたぬべし

久村曉臺尾張人

秋の半御陵に詣てけるに松風いごしんし



んごして聲すごく昔の御物思を恐れな  
らも我身にはかりて最哀れに覺ゆければ  
御經讀侍りて吊奉りける

虫の音につれて寂しき松の風 伊藤隆敬 總州人

うつ波はあれども引く浪はなしこいへる

眞野浦の渚をたづねて 鬼風 奥州人

休らふて袖ぬらしけり秋の風

順徳帝御陵を拜して 雲臺陳良 近江人

莓の香に昔忍はし眞野のあき

順徳帝陵

我こくろ我をわすれて霜寒し 雲厓如草 信濃人

萬乗の君もかかる波濤に遷幸あり嶋根に

残る御陵を拜みたてまつりて

歳経れば松さへをれて苔の花 葛堂靜和 不詳二何所人

○

取あへず早苗の風を手向かな 桃下 京都人

御涙のおもかげ松の落葉かな 虚心 秋田人

明治七年の冬日は小春なる頃眞野の

山陵に詣てんご金丸村の客舎をはなるほ

ごなく翠微にいたれば御廟守るものも見

ぬさ只外かまへ廣やかに石をたたみくき

ぬきやうのもの新たに立りそれよりすす

むごご數十歩にして方七間計り土石老た

る中の苔の御ましにぬかづき侍る此春の



やよひに御靈代をうつされしと聞こも松  
は千歳のかたみをごくめて今にみさをを  
このぶ草なほあまりある昔なりけりをり  
しも十月つごもりに當りぬれば

御かへりを待得し色や神の松 惺菴爲流信濃人

石抱の梅は御愛樹のよしなり

日のぬくみ抱てよ梅の冬籠り 全 人

戀浦に出る同行の老人いはく

承久の帝は鎌倉のあらぬ行爲をにくみて

大稜威ふるはんごしたまひしも時のしか

らしむる處か彼臣の爲にこゝへ行幸の船

つきぬ其頃より浪のうちよするここに引

ぬためしのごころありしか御靈の都へ歸  
せたまひし故にや其よりのちおほろけな  
りこそ

今日は斯浪にも見るや還り花 全 人

眞野の御陵を拜したてまつりて

こほるくや眼にもひやり松の露 素公不詳二何所人

戀が浦にて

打寄する波も返さて今朝の秋 全 人

○

身にしむや眞野の御山の松の聲 間野流美大坂人

合す手に落つめたし松の露 佐藤採花信濃人

順徳院御陵禮拜



ついで踏ていたたく松の落葉哉 天野桑古上毛人  
たた鳴になきけり眞野の杜鵑 全 人

○ 山はこも臉重けや眞野のつゆ 井上由也羽前人

眞野山陵拜して 岩村通俊前農商務大臣

蜻蜒かごぶかご見れば草の上 内山耕二郎

尊さの自つご見へる茂りかな 順徳帝の御靈を拜して 大澤桃月東京人

尊さの風もかほるや眞野の山 拜 順徳帝陵 坡橋越後人

なほ餘りある日の色よ草紅葉 資朝卿の御墓を拜して

黄門のなをなつかしや杜鵑 松本 順軍醫 總監

隠れ松 時ならば五位賜はらむ隠れ松 全 人

眞野御陵を拜して 雲ひくしぬかづくうへを杜鵑 前川笙東近江人

日野公の墓前 幾さしの曇ははれてほごきす全 人

眞野の御陵を拜して 嶋田修三判事

菊白し御稜威のかをりいつまでも 佐渡に旅せし時眞野の御陵を拜し奉りて  
ひたすらに寒氣立けり夏木立 角田眞平號竹冷

眞野山懷古



御陵は佐渡の守りそ千代の春 松嶋十湖 遠江人

拜眞野陵 武井半眠 甲斐人

夏くさもたふごし二千五百坪

眞野の御陵を拜して 尾崎紅葉 東京人

松風をいたく汗の額かな

○ みささきの扉も朽て苔の花 鳥居諦次郎 新潟人

眞野山陵にて 河東碧梧桐 伊豫人

山茶花や供御整へし民あはれ

眞野の御陵にて 古跡菴一翠 加賀人

胸萎る歴史に風のひかりあり

眞野の御陵を参拜するに

浦かせや時失ぬうめ若葉 猪爪菊外 東京人

順徳帝の陵に参る 眞野の入江に朽果んごはの大御歌を磐

かくれによませ給ひて崩御ありし昔の

猶いたいたしく慕はれ奉り涙はふり落

てこくむべくもあらず

若楓こくろの色をうつすらむ 渡邊姜文 加賀人

眞野御陵 杉浦宇貫 雪中菴 十世

額突きぬ折柄の野菊捧けつく

御馬石 全 人

露をわけて撫てけり苔の御馬石

戀か浦



むかしかたる残月白し戀か浦 全 人

阿新丸古跡 全 人

遣りすこす芒の風やかくれ松 全 人

眞野御陵 伊藤松宇 信濃人

眞清水になかるく汗と涙かな 全 人

蝸も御いたはしと泣くなめり 全 人

眞野の御陵を拜す 坪谷水哉 東京人

汗ふいて襟かき合す松のかぜ 眞野御陵に参拜したのは夕日の頸筋に煎

りつく頃であつた。 巖谷小波 東京人

烈こして暑き人日を拜しけり

然し彼の帝の御最後を偲び奉れば三伏な

ほ襟を正すべしだ。

眞清水やこの御前の夏寒く 全 人

眞野神社には帝の御遺物が澤山ある。中に

も御劔の靈驗は。今も尙著に。その御鞘を拂

つた時。恰も山手に虹を見た。

虹涼し御劔の鞘を拂ふとき 全 人

順徳院の御遺跡たる。黒木の御所の御蹟は。

金澤村の字泉にある。これも東宮行啓の記

念こし。まだ白木の御野立所が遺つて居る。

玉垣にかしづき顔や青蛙 全 人

○ 大谷光演 號句佛

木下闇御なつかしさにまたまへる



真野の浦わにて

このへこや夏をしばなく杜鵑

佐々政一文學博士

○

山陵のわか葉にそくくわが涙 横山健堂

八幡こいふところを過るこて

順徳院此所にてこの里過よの御詠あり

此里にこのひ音やなく時鳥 僧 松堂相川永宮寺

おほけなくも此君いかなる宿世ありてか

かゝる波濤の真野の山里には千歳のかし

こき御名をは松に譲り給ひけんと思ふに

恐多くも袂を濕しける

松のかけあたにもせしや時鳥 鈴木素雪本郡夷町人

藻の花もしほらしくさけ戀か浦全 人

真野の尊廟を拜し奉りて

みさくきの花も昔の薫りあり 君山本郡人

雲に入る鳥も来て問へ花の山 臥龍全上

思ひきやなみたて花を詠むこは 一嶋全上

花にやごる鳥も慈愛の姿かな 僧 天珠本郡河原田人

雲の上のむかしを聞や呼子鳥 客耳本郡人

花の名は朽す櫻はかれなから 僧 若何永宮寺

九重やいまもかをりて八重櫻 仙城河原田人

雲の上に花を殘して春くれぬ 宇佐見東白相川人

薫り來る都の花や八重さくら 白意本郡人



真野のみさぎに詣てく  
誰が袖もぬるくや真野の五月雨  
好休全上

真野の御陵に詣す  
古も今もしたはしほごぎす  
笹井曉鳥本郡澤根人

真野の御陵に詣てく  
此の今の影も静けし夏木立  
清水玉枝全上

真野の御陵に詣す  
夏來ても見ても尊こや積木柴  
古城鼎丕本郡小木人

真野御陵  
杜鵑伽はかくさし真野の月  
本間斧刪本郡新穂人

白露になみたそくぐや泉澤  
承久帝の御陵を拜して  
全人

いくむかし咲代りてそ松の花  
しら露に心しくるゝあした哉  
松かせに音を殘して真野の秋  
中川收之本郡新穂人  
同人  
全人

懷舊集下卷終



大正十三年六月二十日御届  
大正十三年六月廿五日發行

編輯者 山本半藏

出版者 兼 眞野村教育會

印刷所 安達音治

新潟縣佐渡郡  
大字新町百六拾參番戶

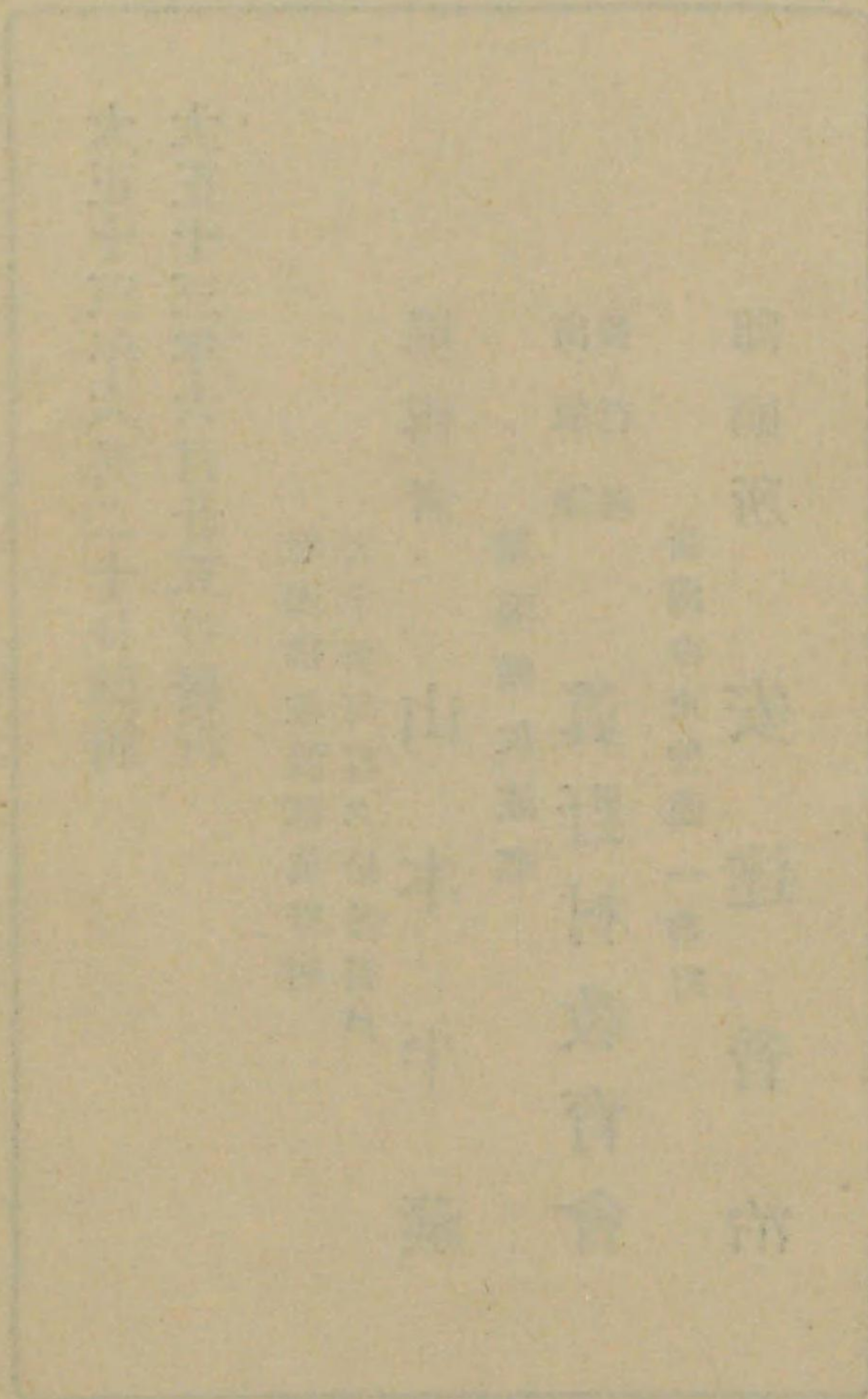
新潟縣佐渡郡

新潟市東仲通一番町



懷舊集正誤

九	頁數	目次	懷舊集正誤
三	行數		
桑園	誤		
桑溟	正		
全	頁數	目次	懷舊集正誤
三五	行數		
評ノ五	誤		
手裁	正		
薄情			
天日			
家爰			
手裁			
薄情			
天日			
家爰			

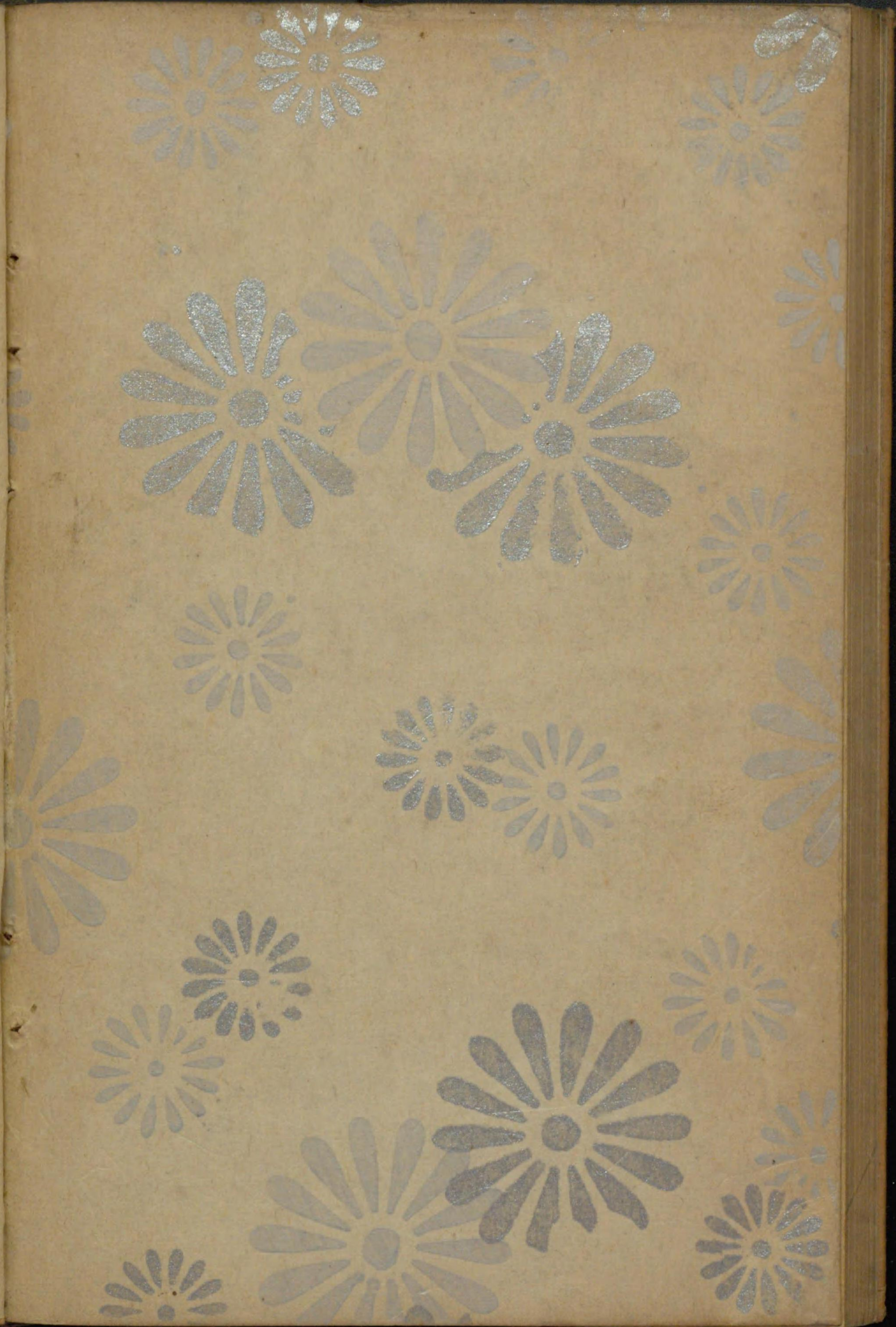




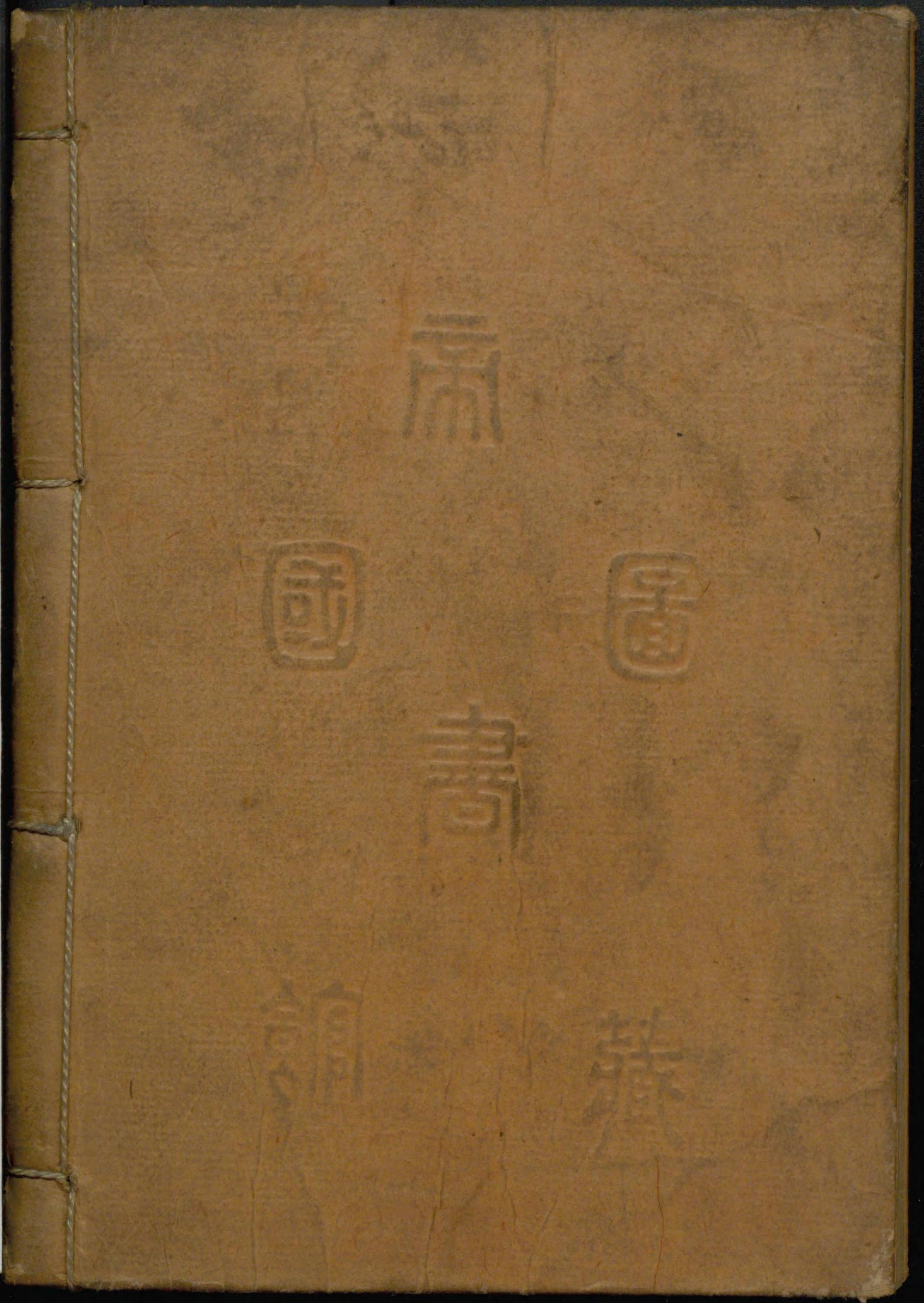




58  
115







帝  
國 圖  
書  
韻 彙

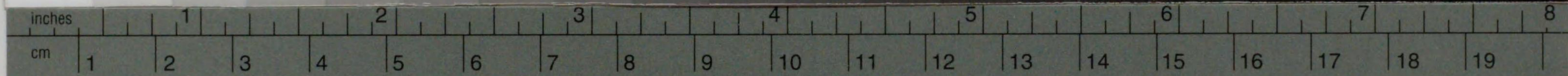


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

